



Servas Japan Tohoku

支部ニュース

No.79



支部長挨拶 その1.	1
支部長挨拶 その2.	1
旅行報告.....	2
T.Sさん(新潟県新潟市).....	2
O.M(宮城県仙台市).....	4
サーバス旅行者受入報告.....	7
M.S 東北支部事務局長(宮城県仙台市).....	7
N.Tさん・H.Mさん(福島県福島市).....	8
K.Yさん(秋田県秋田市).....	9
O.M(宮城県仙台市).....	9
東日本大震災支援報告(後編) T.Nさん(日本サーバスペースセクレタリー).....	10
編集後記.....	11

支部長挨拶 その1.

6月13日に家内と二人で 長岡技科大で、サーバスのPRをしてきました。その結果は、

1. ベトナムのソンさんという留学生がその両親に勧めてみるというくれました。
2. Mさんからお調べいただきましたら、ベトナムには5人のサーバス会員がおられました。代表者の名簿はソンさんにお送りしました。
3. 外国の教員や職員への普及は同大学の国際交流課のSさんから機会を見て勧めてもらうように資料を置いてきました。
4. 留学生の入会については、我が家にホームステイしてくれた4名の現在の方から機会を見てさらに友人に勧めてもらうのを待っています。彼らは、勉強が忙しく、国内旅行をあまりしていないようでした。
5. 市民のボランティアの方が茶話会をしていました。このような接触の方法もあることを知りました。大学の近くでしたらそのようにできますね。この大学は私の家から車で50分です。

弥彦 T.N

支部長挨拶 その2.

こんなはずではなかった！

2012. 09.10

T.N 1949.12.8 生

皆さん いかがお過ごしですか？Tです。新潟県弥彦村も暑いです。でも3月に太陽光発電パネルを設置しました

ので、暑い日には、発電量が多いので我慢しています。縁あって、福島浪江町とつながりがあったものですから、原発に頼らない社会をと考えています。そして、私はつながりを得たらできるだけ大切に『出会い、ふれあい、磨きあい』をしていきたいと思っています。

原発のことですが、首相官邸の原発再稼働反対抗議集会在毎週金曜日に開催されています。9月7日に上京しましたので、そのあたりを見てきました。虎ノ門駅から文部科学省、国税庁、財務省と建物が並んでいます。その財務省の角を曲がると、首相官邸の前まで、ずっと警備と警察車両がびっしりでした。4時ごろ行きましたので、始まるまでは2時間くらいあるのですが、物々しい警備にはびっくりしました。でもどうして再稼働をするのかですね？

意識改革が社会・組織・人を変化させるという兆しになる例を述べます。先ごろのニュースで、日本の節電意識が進展して、期間は分かりませんが、この夏で84億キロワットの節電で、これは原発11基分の発電量だというニュースがありました。詳細は聞き逃しましたが、これは、大変なことですね。この暑い夏でさえそうだとすれば、しかも、オリンピック、高校野球、サッカー、プロ野球などが盛んな時にです。このままいけば、54基の原発もなしにできる日が来るのではないかと思うのは私だけでは無いでしょう。益々高齢化して、人も少なくなるのですから。声を大にして、節電に向けて行動しましょう！！

次の例は、職員意識の差がこのようなロスをなくすという例です。東松島市では、瓦礫1tの処理が9670円だったそうです。これは大槻町の9万6千円の10分の1、石巻市の7万8千円の7分の1です。どうしてこのような差がでたのでしょうか？復興予算は一円でも安く使って欲しいものです。そのために国民の税金も上がっているのですから。ついでにどうしてこんな国になってしまったのかの話です。私は、復興予算19兆円は、全部東北の被災地で使われていると思っていました。それが、9月9日のNHKのニュースでは、神戸大学の先生とNHKで、480件あまりの事業を精査しただけで、2兆円もの全国ベースでの補助金があるというのです。各省庁が分捕った予算だからでしょうね。省庁の思いのままではないですか。どうしてこんな国になってしまったのでしょうか。

旅行報告

TSさん(新潟県新潟市)

初めてのサーバス旅行(5)ーアテネ滞在ー

1. リカベトス山と海水浴

昨日は大失態を犯してしまいました。身なりのいいおっさんにバーらしき所へ連れて行かれ、高価な酒を買わされた。連れてきたおっさんは途中で逃げ、私が代金を払うことになった。乏しい金がさらに乏しくなった。これから旅は続けられるのか不安になり、昨夜はなかなか眠れなかった。でも一夜あけ、アクロポリスにあるパルテノン神殿を見に行ったらその歴史、偉容さに圧倒され、昨日の不安も幾分か消えた。ただパルテノン神殿であった日本の団体ツアーの人達を見たら、また自分が惨めになった。それでもパルテノン神殿をあちこち見て回り、気持ちを落ち着かせた。なにしろ2400年前頃の建物である。建造当時の大理石の神殿は今では想像もつかないくらいの華やかな姿であったに違いない。神殿の近くでウィーンから車で来た3人の若者があった。車でアテネまで来るとはさすがヨーロッパ大陸である。3日だかかかったと言っていた。若いときはちょっと無謀に思えることでも平気で行える。パルテノン神殿の東に小高い山が見え、午後にそこに行くことにした。それはリカベトスという山であった。



リカベトス山は標高277メートルの山というより小高い丘と言った感が強い。アクロポリスからどれくらい歩いたろうか。山の入り口までは難なく着いた。今は頂上までケーブルカーがあるそうだが、当時はケーブルカーもなく石畳を歩いて行った。頂上に着き、西の方を見たらアクロポリスが見えた。眼下には白い家々が目につく。気温は高いのだが、蒸し暑くはない。からっとしている。頂上でドイツの若者とあった。長髪のヒッピー風の若者である。ただおとなしく、非常に礼儀正しい若者であった。知っているドイツ語で話しかけたら、向こうは日本人らしき者からドイツ語で話しかけられたのが意外だったのにかにこにこしながら私のドイツ語に答えてくれた。



リカベトス山からの帰る途中びっくりするようなハプニングがあり、私は大いに元気をもらうことになった。パンをかじりながらとある公園で休憩した後、私はホテルに帰ろうと歩いた。しばらくすると反対側から日本人らしき若者が歩いて

きた。近づくそれは新潟からモスクワまで一緒だったツアーの人であった。確か山形出身だと言っていた。我々は「やあ、元気？」と言葉を交わした。向こうも一人旅で日本人が恋しかったのであろうか、ほっとしているところがあった。この後私はイタリア、スペイン、フランスと回ったが、ミラノのユース hostel でやはり同じツアーの学生二人に会った。この二人の学生には旅の終わり近く、パリのエッフル塔近くの橋の上でもあった。日本人は行くところが決まっているのだろうか。

思いがけず山形出身の若者と会い、しばらく通りを歩いた。今度は私よりも幾分年上の人と会った。向こうも一人の旅であったが、後で聞いたら名古屋の芸術大の先生で、年末まで旅行するのだと言っていた(帰国後彼に写真を送ったら年末に帰国したばかりだと礼状を頂いた)。知らない者同士がアテネの路上で会い、意気投合して海に泳ぎに行こうということになった。海に行く前にその先生のホテルに連れていってもらった。私の部屋とは違い、部屋の窓からはパルテノン神殿が見えた。私と山形出身の若者は部屋のシャワーを使わせてもらった。芸術大の先生からは武勇伝を聞いた。すでにちょっと触れたが、彼も変なおっさんにひっかかったのである。しかし彼の場合はすごい。ホテルに戻り、少し休んだと警察に行き、警官を連れてお金をぶんどられたバーに行き、すごい剣幕で、お金を返さないとぶっ殺してやると息巻いたそうだ。日本男児ここにありである。事の結末はどうだったかは聞かなかったが、相手のギリシア人のバー経営者も恐れをなしたに違いない。おそらく彼は文部省(当時)の海外視察派遣であったろうから私みたいにそれほどお金には困らなかったはずであるが、彼もまんまとお金をぼられたことが相当頭にくたのであろう。



シャワーを浴び、しばらく休んだ後3人はバスで海に行くことにした。スニオン岬方向だった。スニオン岬はアテネの南東 70 キロ位の所に位置するが、我々が行った海水浴場はアテネからはそんなに離れていなかった。どれくらいバスに乗ったかは今は定かではない。海水浴場には多くの若者がいた。我々は皆海水パンツに着替えた。海は青色ではなく、エメラルド色である。私は何度か海に入り、泳いだ。遠くには島らしきものが見える。私は昨日のことはすっかり忘れていた。ちよいと脇をみると若い男女が抱き合っている。そんなことはどうでもいい。私はただ海に寝そべてぼっとしていた。さんさんと照りつける太陽は嫌なことはすべて忘れさせてくれた。まだ旅は始まったばかりである。私は昨日のことがなければエーゲ海の島に行きたかったが、あの代償はあまりにも大きかった。こんどまたギリシアには来るかもしれない。島巡りはそのときまでとっておこう。それに 8 月上旬にはイタリア北部のサーバス会員を訪れることになっている。

海には何時間間いただろうか。日が傾き初め、我々はアテネへ帰ることにした。バス停の時刻表を見るとバスが来るまでかなりの時間がある。誰かがヒッチハイクで帰ろう、と言い出した。それで思い切ってヒッチハイクをすることになった。道路に立ち、右手の親指を挙げて、ヒッチハイクをしたら思いのほか早く車が止まってくれた。アテネに帰るギリシア人若者だった。5人乗りの赤い車で、我々は早速車に乗った。ドライバーは一人か二人位と思っていたようで、3人が乗るとちょっと驚いた様子だったが気持ちよく乗せてくれた。車中、ギリシアは川がないとかこれからの旅行日程を説明したりしたが相手はあまり英語がうまくなかった。何とか車はアテネ市内に着き、我々はお礼を言い、車を降りた。夕食は3人で食べることにした。市内の繁華街にマーケットらしき所があり、そこへ行くことにした。ギリシア語で食堂は「タベルナ」である。そのタベルナで夕食を食べたのである。肉と米(これはばさばさしていて少しもおいしくない)がメインの料理を注文した。食後のデザートに冷えたメロンが出てきた。冷たい水と冷えたメロンは特に忘れがたい。



3人は明日からまた別々の行動を取る。山形の若者はギリシアの後どこに行くのか私は敢えて聞こうとしなかった。芸術大の先生はギリシアの後には他のヨーロッパの国々を回りその後はアメリカに行くと言っていた。私とは言えば明日はアテネ西方パトラスから船でイタリアに行き、ローマに行くことにした。

2. パトラスへ

昨日は二人の日本人と会い、大いに盛り上がった。やはり日本人は一人でいるより多くの人という方が元気が出るようだ。でもそんなことは言っていられない。今日からまた一人旅が始まる。

今日はアテネを引き揚げてアテネの西にあるパトラスまで行くことになっていた。パトラスはアテネから正確にはわからないが300キロを越える距離である。そこからイタリア・ブリンディッシュまで船で行くのである。船は夜出発して翌日に着く。パトラスまでバス、電車が出ているが、昨日ヒッチハイクが案外うまくいったので、思い切ってヒッチハイクすることにした。でもどうやってパトラスへ通じる道までいくのか全く分からなかった。それでとあるホテルに入ってフロ

ントに聞くことにした。フロントには多くの若者がいた。聞いてみたらスウェーデン人であった。ホテルのフロントにパトラスへ行く道を聞いたら、紙にバスの番号を書いてくれた。それに乗ればアテネ郊外のパトラス行きの道路に行ける。私は早速お礼を言い、そのバスを探した。バスは簡単に見つかり、私はアテネ郊外まで行くことができた。問題はそれからである。ヒッチハイクは簡単だと思っていた。ところが炎天下何時間経っても車は止まってくれない。道路の反対側にヒッピー風のアメリカ人らしき人が二人やはりヒッチハイクを試みていた。私は「うまくいかないね」と話しかけると「おまえは反対側に行け」という。ヒッチハイクに慣れている人は国旗を振ったり、行き先を書いたプラカードをかざしてアピールする。わたしはそのどれもやらなかった。というより国旗もプラカードも用意していなかった。それからどれくらい待ただろうか。ようやく一台の車が止まってくれた。私は「パトラス」まで行くことを中年のドライバーに告げた。あまり英語がうまくないそのギリシア人は途中まで乗せてあげると言った。その先はどうにかなるだろうと私はその車に乗った。しばらく行ったらドライバーはここまでだといひ、私を降ろした。そこから私はまたヒッチハイクを試みた。待てども待てども車は止まらない。私はヒッチハイクをあきらめてバスで行くことにした。すぐにバスが来たので私はバスに乗り込んだ。バスの中には海水浴から帰ってきた子供や若者で一杯だった。バスの中で立っていると若い女性が日本人かと話しかけてきた。ギリシア人というより西欧系の顔だった。私はヒッチハイクでパトラスに行く予定だったが、なかなか車が止まってくれず、バスで行くことにしたと彼女に説明した。アテネ市内に入る所で彼女はバスを降りろと言う。彼女と子供も一緒にバスを降りた。ちょうどそこにタクシーが来た。彼女は運転手何か二言三言言い、運転手にお金を払った。彼女は私をパトラス行きのバスターミナルまで連れて行くようにと運転手に言ったのである。見ず知らずの旅人に対するなんとという親切さ。旅先での親切な行いには感謝の言葉もない。私は思わず彼女をハグし、住所を聞いた。彼女はすぐに私の手帳に住所を書いてくれた。帰国後私は彼女に礼状を書いたのは言うまでもない。とにかくパトラス行きのバスターミナルまでタクシーは連れて行ってくれた。パトラスからの船は夜遅く出航するからまだ十分時間はあった。アテネ郊外のバスターミナルからパトラスまでどれくらい時間がかかったか今は記憶にない。5-6時間位時間がかかったのだろうか。夕方パトラスに着いたが、外はまだ明るかった。船の乗車券を買いにとある旅行代理店へ行った。その待合室で私は一人の日本人に会った。聞けば彼はパリに住んでいて、何をしているのかというとパリ大学日本語学科に籍を置き、日本語を勉強していると言う。当時は会社務めを辞めて一人旅をしたり、彼のように外国の大学に籍を置き、外国生活を楽しむ若者が少なからずいた。彼はパリに来たら寄ってくれと言ひ、アパートの住所を教えてくれた。その日本人学生のアパートには帰国前に訪れ、一晩泊めてもらった。パトラスからイタリア・ブリンディシまでの乗車券は甲板クラスであった。一番安いチケットである。夜は満天の星を仰ぎながら甲板に寝るのである。船の出航は夜10時過ぎであった。各国の若者はデッキにシュラフにもぐりこんだり、船内の通路に横になったりしていた。

アテネにはもつといたかった。島巡りもしたかった。どれもこれもあのバーでの大失敗が原因でダメになってしまった。アテネにはわずか3日しかいかなかった。船が港を出るとき、私はまたチャンスがあったらギリシアに来ようと心に決めた。パトラスの明かりが次第に小さくなり、船はイタリア目指してアドリア海へ進んでいった。

O.M(宮城県仙台市)

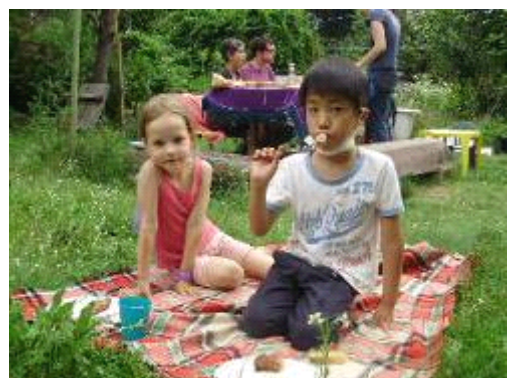
7月26日～8月25日 母子ドイツ2人旅

7/26～7/29 Potsdam J.Pi(f) & R.K(m), C(5歳), L(2歳)

1年半前、震災の直前に我が家に滞在したRolandを訪ね、モスクワ経由でポツダムへ到着。初めてのヨーロッパで、右も左もわからず、ドイツ語も話せない私たちは何から何まで世話になった。年の近い女の子がいるので、6歳の息子はすぐ友達になって仲良くなった。次の日は有名なサンスーシー宮殿を見に行った。翌日、フィラデルフィアに住んでいてベルリンに休暇滞在中のRolandの友人カップルが訪ねてきて、アインシュタインの家やポツダムの旧市街地などを見物の後、自宅の庭でバーベキューを楽しんだ。ドイツでは人を自宅でのバーベキューに招待するのが最高のもてなしのようだ。

7/29～8/5 J.R.ファミリーの友人宅

ドイツでは年に6週間の休暇が義務づけられている。そして、一時期に訪問客が集中するのを避けるために、地方によって休暇の時期



Rの長女クララと。息子はソーセージが大好きなので、食事に困ったときはソーセージばかり食べていた。

をずらしている。この時期はポツダムでも休暇時期なので、イエナという町と一緒に休暇に出掛けた。ここには Roland 夫婦の友人のアパートがあるが、彼女が休暇中で留守なので、その間、彼女のアパートを使わせてもらえるということだった。滞在中、近くのお城や町を見物に行った。ドイツでは何百年も前の建物が何度もリフォームされながら現役で使われている。昔の小国の統治者が住んでいたお城もそこそこにある。町並みがおとぎの国の中のように、歩いているだけで楽しい。有名人の家も多い。ここではヘンデルの家を見た。7/31に Roland 家族はポツダムに帰って行ったので、その後は私と息子だけが残り、イエナを基点にワイマール、エアフルト、アイゼナハといった町にデイトリップに出掛けた。自分たちで苦労して歩き回ると、ようやく立ち回り方がわかってくる。バスや電車での移動もだんだん慣れてきた。この辺にはゲーテの家やシラーの家、バッハの家もある。

8/5~8/7 Frankfurt L S.(f) & A.. D(m), K(6歳), A(3歳)

いよいよイエナを離れ、長距離移動。フランクフルトはドイツで一番の国際都市で、ドイツ中の金融機関が集まる。お世話になったこの家族もラリッサはドイツ人だが旦那さんはイギリス人だ。滞在中、ラリッサがドイツの温泉に連れて行ってくれたが、デザインが中途半端な日本風だし、男性も女性も全裸のままぶらぶら歩き回っていて、なんだか変な所だったなあ〜。でも、ドイツに来てずっとシャワーだけだったし、毎日歩き回っていたから、湯船につかれて気持ちよかった。

8/7~8/10 D. M.(m) & E.(f) M.

フランクフルトから電車で40分程南へ行っただけなのに、ここはまるで山の中の大自然…。家の窓から見渡す限り他の家は見えない。でも、ドイツは鉄道と公の交通網が充実していて、こんな所でも路面電車やバスが通っている。すごいなあ〜。Michael は WWOOF という組織にも所属しているので家にはもう1人ルーマニアからの訪問者がいて、家の仕事を毎日していた。無報酬で1日中働き詰めのように見えたので、色々話を聞いてみると、どうやらドイツで仕事を見つけたらしい。それで、収入がなくとも現地にいた方がいいということで、ここにもう3週間位いるらしい。私たちが畑の草取りなんかをした。自宅の庭など草ぼうぼうなのに、休暇でドイツまで来て草とり…とも思ったけど、まあ、これもいい経験だ。

8/10~8/13 N.J. の両親の家

Roland 家族の住むポツダムでは既にホリディシーズンが終わり長女の Clara も小学校へ入学していたが、週末を利用してハルツ地方に住む J(Roland の奥さん)の両親宅で落ち合おうということになっていた。Jana

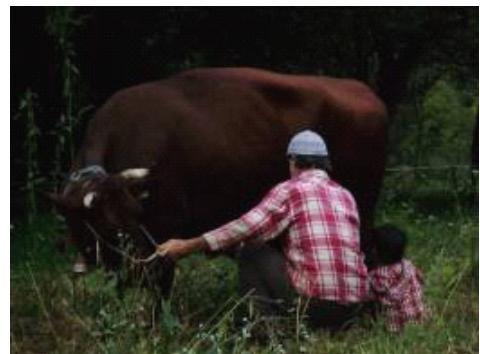
の両親ともとてもいい人たちで、特にお父さんはとてもまめな人で、「何よりも子供が一番」と言って朝から晩まで子供の手を握って面倒をよく見てくれる。家に入るとあちこちに日本語で「こんにちは」とか「どうぞよろしく」とか書いた紙が貼ってあった。後から Roland に聞いたら、インターネットで調べてまねをして書いたらしいが、それはそれは何時間もかけて書いたそう。Roland 家族は学校があるので、私たちよりも1日早く家へ帰って行った。帰った後、Jana のお母さんは「帰ると寂しくなるのよ」と言って泣いていた。ちょっとびっくりしたけど、どうやらドイツでは遊びに来た子供家族が帰る時に泣いてしまうのはよくあることらしい。それまで、日本の親子の結び付きは世界でも固いと思っていたのが、ここに滞在した3日間ですらどうやらそうでもない



ドイツの典型的な食事は朝も夜もこんな感じ。息子がしきりに暖かいものが食べたいと言っていた気持ちもわかる。



ドイツでは乗りたいバスがあつて何分で来るか電光掲示板で知らせてくれるので助かった。



ドイツの典型的な食事は朝も夜もこんな感じ。息子がしきりに暖かいものが食べたいと言っていた気持ちもわかる。

思えてきた。

8/13～8/15 Hmburg M. E-H(f) & M. H(m)

Hamburg へ行く途中、Hameln へ寄った。有名な『ハーメルンの笛吹き男』の物語の町だ。この話、実話だということ、ご存知だろうか？昔、本当にあった話なんだそうだ。そして、笛吹き男が住んでいた家は今はレストランになっていて、“ネズミのしっぽ料理”を出しているそうなのだが、本当は豚肉の細切りなのだという話を、息子がガイドブックを読んで教えてくれた。Hamburg で感じたこと…、西ドイツの都市は東ドイツの田舎町とは違う。高層ビルがあるし、新しい家も建っている。不思議なことに、大都市の方が見るものが少ないのに観光客の数が多くて、町を歩きかう観光バスの数も半端じゃない。ここでのホストは物静かな M と M。娘さんも息子さんも独立して家を出たが、娘さんのボーイフレンドだけが同居していた。日本人にとっては不思議な感じ…？

8/15～8/17 G. I(f) & F. (m) L

Goslar は魔女の町として有名で、息子はこの町に来るのを楽しみにしていた。土産屋で買った魔女の人形は今、我が家の天井からぶらさがって、間近に控えたハロウインを演出している。ホストの Inge はすごくいい人。小学校の補助教員をしているだけあり、息子にもとてもよくしてくれた。この町の建物はほとんどが 1500 年代に建てられたもので、町並みがそれはそれはかわいらしい。

8/17～8/19 K. R. のお父さんが所属する山岳クラブの山小屋に滞在

週末を利用して、また Roland 家族と落ち合った。今度はドイツ東部のドレスデンの近く、ケーニヒシュタインという町だ。ここはザクセンのスイスとも呼ばれているが、その山の高さはわずか 200m 余り…。山の少ないドイツを象徴している。不思議な形の岩がそびえる山は小さな子供でも登山可能だ。そんな切り立った山の上にも恒例のお城が建っている。Roland のお父さんが登山クラブに所属しているので、その会員専用の山小屋を宿泊場所として使用できた。

8/19～8/21 D. W.(m) & U.(f) H.

ドレスデンは余りにも有名な町だ。戦時中、大空襲を受けて、町のほとんどが壊滅状態になったのだ。ホストの Ute が戦後の写真を見せてくれた。町全体が廃墟と化し、3.11 の津波被害を思い起こさせた。町の復興には何年も何年もかけて、僅かずつ建て直すしかなかったという。だが、今はドイツを代表するとても美しい町となり、見ていると 3.11 の復興もどこか明るい兆しが見えるような気がしてくる。

今回ホストをしてくれた人々はみなとても優しくいい人たちだった。ドイツの人は、気質的に日本人とどこか似ているところがあると思った。物静かで、礼儀正しくて、保守的で、まじめで、客のもてなし方や接し方も日本人のように誠意を込めてもてなしてくれる。ドイツは何百年も前の建物がそのまま町並みになっている。地方によってもデザインが異なるがどの町に行っても家々がとてもかわいらしい。旧東ドイツ時代には人々は学校で英語を全く教わらなかったらしく、町では特に年配の人たちはほとんど英語を話さなかった。バスの運転手や駅員が英語を話さないのには困った。ベルリンの壁崩壊後は、にわかに学校で英語教育が始まり、先生たちは自分自身英語を学んだことがないのに突然英語を教えるなければいけなくなって苦労したそうだ。6 歳の息子は今までの人生でこんなに歩いたことがないという位の距離を、毎日歩き回ることができた、ということに私が一番びっくりしている。これからドイツに行く人にとって一つアドバイス…、スーツケースはドイツ向きではありません。ドイツは石畳の道が多い、階段も多い。特にサーバス旅行をするなら、4 階や 5 階まで階段で昇らなければならない可能性が高いので、バックパックをお勧めします。キャリーつきのバックパックも



売られているので、それもいいかもしれません。

サーバス旅行者受入報告

M.S 東北支部事務局長(宮城県仙台市)

受け入れ報告① オーストラリア 80 歳 L と 77 歳 C のご夫婦との再会 7/17～7/23 まで

ご夫婦が前回我が家に滞在したのは 1990 年の 5 月のことでしたから、22 年振りの再会となりました！ 混雑する仙台駅に迎に行ったのですが、すぐ見つけることができました。22 年間という歳月を重ねていった私たちですが、昔のままの元気なご夫婦との再会に安堵し、興奮しました。

前回のような過密なスケジュールではなく今回は飛騨高山、佐渡、仙台、北海道のニセコを一週間づつ、一ヶ月のゆっくりとした旅でした。高齢者ご夫婦の旅の仕方を学ばせてもらった良い機会でもありました。彼らの年齢と行動を考えたなら、私たち夫婦は後 20 年間は海外へサーバス旅行ができるわけですから、夢が多いに膨らみました。

一週間の滞在も彼らの希望で、朝食と夕食を我が家で食べて、日中は二人で気ままに過ごしてもらいました。気ままな旅と云っても、被災地の石巻の訪問もちゃんと一日入れていました。22 年前の滞在当時を思い出して、「前の時は私たちの所に怖がって近づいてくれなかったのに、今回は子どもも高齢者も笑顔で話しかけてくれるのでとても嬉しい」と言ってくれました。日本の英語教育も亀の歩みかもしれませんが前進している証ですね。来年は私たちが彼らとの再会をオーストラリアで果たそうと約束して別れました。



石巻駅にて

A heartfelt smile gives warmth enough for three winters.

Mongolian Proverb.

受け入れ報告② 神奈川県に住む O. I さん 50 歳 8/1～8/3

日本サーバスに JTW (Japanese Travelers are Welcome) の制度ができて、海外からの会員だけでなく、日本人の会員の滞在希望が少しずつ出てきていると感じています。我が家でも O. I さんで 4 人目です。

サーバス入会の時、良くきかれることがあります「会員になっても…英語を話すのは得意でないのですが大丈夫ですか」と。JTW の制度はその点の心配はいらないわけですから、これからもっと増えてサーバス活動を広げてほしいと願っています。

さて、O. I さんは現役の小学校の先生ですが、夏休みは休養を取ることもありますが様々の講習を受けて自分を磨く大切なときでもあるそうです。頑張り屋さんの O. I さんは我が家に滞在の前に松島で 2 日間の講習会に参加していましたし、さらには今年の異常な猛暑に身体の消耗が激しかった事もあったのでしょうのでしょうか、2 日間の我が家での滞在中、食欲がなく大儀そうで心配しました。しかし後半の予定もキャンセルせず、被災地南三陸町での次の講習会に参加するために仙台を出発して行きました。

「いじめ問題」もマスコミで取り上げられ時でしたから、彼女に尋ねてみましたが「もちろんありますが…」と言われましたが、それだけ教員間で深刻な問題となっているのか言葉を濁されました。

以上

N.Tさんからの事務局への手紙

先日、8月17日(木)イスラエルのMr. Hさんが元会員の米沢のSさんに連れられた私の家を訪問されました。彼は1999年に私の家にHomestayしたことがあり、今回はそれ以来2回目となります。こういうケースもめずらしいですね!彼は奥さんを亡くしており男手で息子一人、娘一人を育てたそうです。今年の10月の末頃にはオセアニアと南米を歩くそうです。

N.Tさん・H.Mさん(福島県福島市)

1. 氏名 B.U. 英国人女性(コンピュータシステムエンジニアの夫+8, 6, 4歳の男の子の母親(40歳))
2. 職業 劇場のプロデューサー
3. 受入者と受入月日:N.T 8月8日~10日
 - 8日: 福島、金谷川駅へ出迎え
二本松市「霞が城址」へ案内⇒中山長男宅へ案内。
 - 9日: 桃畑(もぎ取り)⇒福島市「民家園」⇒信夫温泉(露天風呂)へ案内。
 - 10日: 早朝、福島駅へ送る。長崎市へ向かう。

H.Mの親戚の桃畑でもぎ取り体験(福島市フルーツライン沿い)



「福島市民家園」

伝承されてきた生活遺産を大切に保護し活用するための文化財保存施設。敷地約110,000㎡の園内には江戸時代中期から明治時代中期にかけての県北地方の民家を中心に、芝居小屋、宿店、料亭、板倉、会津地方の民家等が移築復原されています。また民家園内には生活・生産用具を展示し環境復原も可能な限り進めています。

ここには 芝居小屋、『旧広瀬座』も移築されています。福島県伊達市梁川町にあった芝居小屋です。明治20年代に梁川町民有志で大衆娯楽施設として



建てられたものでしたが、1986年、広瀬川が氾濫、河川改修に合わせ福島市民家園内に移築されたものでした。ゲストのB.U.さんは殊のほか熱心に見ておられました。彼女はイギリス、NottinghamのPlayhouseに勤めているので芝居小屋の構造、ます席、さじき席、花道に興味を持ってくれました。そして芝居小屋に備えつけてある「雑記帳」に下記のメッセージ(英文)を遺してくれました。このメッセージは(外国人に訪問されて)福島市を喜ばせました。

今日、福島を訪れて、数人の新しい友達と幸運な時間を過ごしています。
 私はノッチングハムの劇場で働いています。
 この歴史ある村、旧広瀬座を訪ねられてこんな喜びはありません。
 英国に戻ったら友人、同僚にこの素敵な見聞を語るつもりです。
 Thank You.
 B. U. Desby, England, UK.

以上、

K.Yさん(秋田県秋田市)

8月8,9日

英国人が我が家にやってくる。定刻の時間に駅の観光案内所で待つ。いつものドキドキ感、顔を見て握手を交わすまで毎回この緊張。携帯にメールが入り盛岡が豪雨で遅れるらしい。竿燈祭りのため外人観光客もよく目につく。しばらくしてまたメール「案内所の前で待っている。見回すが英国人らしき人物が見当たらない。ほかの案内所かと思い捜したがいない。もう30分はたっている。どうしたんだろう。事情を案内所のひとに説明したところ、すぐ見つかった。なんと、とんだ私の思い込み。英国人ではあったが頭はちりちり、皮膚はくろい、お互い顔を見合わせ大笑いしたかったが、そこははにかんで事を済ませた。

今月10、11日、4度目となるドイツ、ハンブルグのトーマスさん、アルコールが入ると冗舌になり、あらためて自分の語学力不足に痛感する。

O.M(宮城県仙台市)

その1. Ms. M. W.. オランダ(東京在住) 6月15日~16日

2010年7月にオランダからの4人家族を受け入れ、彼らが東京に住み始めてから2年が経った。奥さんのMereiがオランダ大使館で仕事をしていて、今年6月に東北の被災地を視察に来るといので、我が家に泊まってもらった。15日の夕方に着いて、皆で夕食を食べに出掛けた。我が家に帰ってお茶を飲みながら僅かの時間をおしゃべりして過ごした。次の朝、Mereiは9時の新幹線で陸前高田へ発ったので、一緒に何かをする時間はほとんどなかったが、それでも楽しいひと時だった。

サーバスのゲストを受け入れると、「こんなところも意外と日本人と似ているものなんだなあ」とか「国が違っても考え方は同じなんだなあ」とよく感じる。私がアメリカ大陸でタフな一人旅をしていた時は、むしろ「人間ってこんなに感じ方や考え方が違うものなんだなあ」とか「色んな人間がいるものなんだなあ」と、国民性の相違ばかり目に付いていたような気がする。だから、トラブルから自分の身を守るすべも学ばなければならなかったし、人との付き合いや関係を割り切って考えることも必要だった。今思うと、私はアメリカ旅行中、どれだけひどい人間たちに出会ってきたのだろうと思う。しかし、サーバスのゲストは皆、異文化を尊重するし、礼儀正しくて、まるで他人とは思えない。安心して受け入れることができるし、割り切りの人間関係ではなくて、本当に友達になれるのがとても嬉しい。Mereiと過ごした短い時間にもそれをよく感じた。

その2. Mr. K, T.Kさん, T.Nさん 6月19日

4年ぶりにベルギーのロイヤル・フランダース・フィルハーモニー・オーケストラが来日した。そのバイオリニストであるKubalaさんは前回コンサートのために来日した際、我が家に泊まった。今回は日本サーバス・ナショナル・セクレタリーのT.Kさんとともに来仙し、Tさんに案内してもらいながら被災地を訪れた。その後、皆さんで我が家に寄ってくださった。次の日にはコンサートを控えていたため、宿泊はされなかったが、しばし、楽しい語らいの場を持つことができた。特に最近ピアノを習い始めて、サーバスのゲストの訪問を楽しみにするようになった6歳の息子がKubalaさんが泊まっていけないことをとても残念がっていた。台風が近づいていたため、夕方早々に仙台駅へ発たれたが、翌朝のニュースで、電気障害のため新幹線が明け方まで運休していたことを知った。新幹線が動き出したのは午前3時過ぎでそれまで仙台駅で足止めを食らっていた、今思うとその日は泊めてもらえばよかった、と後に送られてきたメールに書いてあった。そのうちベルギーにも行ってみたいと思う。



東日本大震災支援報告（後編）

T.Nさん(日本サーバースペースセクレタリー)



2012 3.17 国内会議

10月に実施した本吉「はまなすホール」でのロックフェス、津谷中学校の吹奏楽の演奏もあって楽しいひと時を過ごした。

3月27日の Zepp Sendai のイベントに津谷中学校の吹奏学部を招待している。

新聞にも日本サーバスの名前が載った



年末は何といても餅つき

約350人分の餅をついて2011年の支援を終えた。

2012年は1月14日から運搬を再開した。

これまでの活動の概要

- 3月29日から白石市内のボランティアにより、物資の調達
- 4月2日 気仙沼へ2600食、1000枚の肌着、350食の炊き出し(4トン車1台)
- 4月5日 山形で食材調達(豆腐、納豆500食、350食のカレー食材運搬)
- 4月7日 気仙沼から大船渡に移動物資運搬
- 4月12日 石巻へ物資運搬(長靴、手袋など)
- 5月連休明け、山形市から物資調達(10トン車4台消毒薬、お茶、マスク等)
- 5月10日 気仙沼へ物資運搬(4トン車1台:台所用品、蒲団)
- 6月2日 山形東根から物資調達(蒲団、毛布)
- 6月3日 名取閑上、下増田地区の情報収集
- 6月8日 石巻、気仙沼へ物資を運搬
- 6月16日 石巻へ物資運搬
- 6月19日 気仙沼へ物資運搬(4トン車1台)
- 6月23日 山形県長井市から紙オムツ調達(4トン車1台)
- 7月1日 石巻「遊楽館」へ紙オムツ、タオル類運搬(4トン車1台)

- 7月6日 石巻「遊楽館」へ物資運搬(4トン車1台)
- 7月13日 石巻へ物資運搬
- 7月15日 山形県村山から毛布35枚調達、石巻に運搬
- 8月14日 仙台なつぎの(タオルケット、タオル、マグカップ、消毒薬等運搬)
- 8月17日 山形県から蒲団運搬
- 8月26日 仙台なつぎの毛布運搬25枚
- 8月31日 石巻紙オムツ運搬
- 9月7日 仙台から衣服、水等運搬(4トン)
- 9月9日 石巻紙オムツ運搬
- 9月24日 気仙沼 タオル敷き毛布運搬
- 10月6日 山形村山農高から敷き毛布140枚運搬
- 10月7日 敷き毛布140枚乾燥
- 10月13日 気仙沼敷き毛布108枚運搬
- 10月23日 ロックフェス(音楽支援交流)実施
- 10月26日 山形村山農高から毛布800枚積み込み
- 10月27日 気仙沼・石巻に毛布運搬
- 11月2日 気仙沼に消毒薬、タオル、敷き毛布運搬。白石で気仙沼フェア開催
- 11月10日 山形県村山農業高校からワゴン車2台分の毛布を運搬して山形県危機管理課扱いの物資運搬が終了。(計2000枚以上の毛布、布団)
- 12月26日 もちつき350食、モチ150パック運搬
- 2月3日 布団15組、シーツ15組、衣類3パック石巻運搬
- 2月7日 布団3組、ノロ6箱、ジェル16箱、除菌クロス6箱、フェイスタオル1箱、紙おむつ子供用10パック石巻、気仙沼山田、馬籠運搬
- 3月27日 Zepp Sendai ロックフェス(音楽支援交流)被災地招待予定

編集後記

支部ニュース No.79, いかがでしたか。震災後にも関わらず予想を大きく上回る盛りだくさんの原稿の量で、期待を嬉しく裏切る結果ですね。次回支部ニュースも記事が集まり次第発行いたしますので、随時、原稿をお寄せください。また、お気づきの点がありましたら、お知らせください。

O.M